

スピノザの『知性改善論』に関する一考察

藤 本 吉 蔵

目 次

- 一 はじめに
- 二 「知性改善論」の構造及び梗概内容
 - (1) 道徳論的序論について
 - (2) 総論について
 - (3) 各論について
- 三 未完要因の検討
- 四 未完要因の根源
- 五 おわりに

一 はじめに

本稿では、私のスピノザ研究の一環としてデカルトの「方法叙説」Discours de la méthode⁽¹⁾やベーコンの「ノヴァム・オルガヌム」Novum Organum⁽²⁾に匹敵すると思われる「知性改善論」Tractatus de intellectus emendatione⁽³⁾やスピノザの「知性改善論」に関する一考察(藤 本)

取りあげ、スピノザが試みた方法論構築の構図を分析検討し、研究の覚え書きとしてその意味するところを縷述したいと考えるものである。

扱て、周知のように、近代の原理は、「形相」と「質料」を根幹とするアリストテレス的スコラ思想を排撃して、自然の客観的實在性を発見することから確立された。それは、超自然的な恩寵の力を通じて完結的に構成された彼岸中心の精神世界、詰り現実生活に於ける理論的実践的な諸関係一切が彼岸的なものへの準備段階と解されていた教義や信条を思想体系の礎石とする目的論的自然像、を打ち破って純粹に「自然の自然性、實在性を問題にすることによって見出された」⁽⁵⁾無限な延長世界が自立的に構成される自然観の認識・探究・拡大・創造を原理とするものであったと言ってよい。こうした自然観を構築しようとする気運は、各地に於ける社会情勢・風土・民族性等に依じて、抽象的な思弁よりも現実的な事柄を重要視する経験主義、自己への内省という形をとる懷疑主義、或は従来の自然事象についての質的観察に代って数量的観察を強調する機械論的自然観、等を生み出した。⁽⁶⁾いうまでもなく、それ等の主義構築は、中世思潮を破って新たな学問研究の方法論の発見を契機として醸成されたものといえよう。⁽⁷⁾而もそれ等は、方法論発見の過程に於て、「人間は考える葦」⁽⁸⁾であると精神の尊厳を主張しながら、他面では、「この無限なる空間の永遠の沈黙が私を恐れさせる」と嘆いたパスカルや *cogito ergo sum* ⁽⁹⁾ という命題のもとに「精神を自然から引き離した」デカルトの見解に代表される如く、心身の二元論に窮する西欧文明の深刻な課題を内包していた。実に、この心身の二元対立問題こそは、Martin Heidegger が「*Sein und Zeit* の共在「肢」⁽¹⁰⁾」を核とする *Ontologie* を分析するにあたって、デカルトの *cogito* をめぐって思索が続けているように、今日でも十分に解決されていない課題である。

ところで、前述した状況下で、スピノザが学問研究の方法論として、ものした「知性改善論」は、スピノザの死（一六七七年）の数ヶ月後に、スピノザ遺稿集の中の一編として、Jahrich Jelles⁽¹²⁾に依り公にされた。この書の執筆時期については、「読者に告ぐ」というタイトルのもとに編集者に依つて作成されたと思われる「知性改善論」の序文内容⁽¹³⁾から、同著が極めて初期の作品であることを推測し得ることや、スピノザが一六六一年一〇月二一日付オルデンプルク書簡への返書として認めた末尾の一節、即ち「何様にして事物が存在し始めたか、また何様な連鎖でそれが第一原因に依存しているのかという貴殿の新たな質問に関して申し上げれば、私はこの件について並びにまた知性の改善について、纏った小品を作成し、現在その筆写と修正に従事しています……その出版に関してはまだ明確な計画が立てられておりません……出版の暁には現代の神学者達が憤慨して、争い事を極度に嫌うこの私に彼らの常とする憎念を以て迫ってくることを私は恐れているのです……神の教えを説く人々が神の属性と見定めているものを私は被造物と思考し、逆に被造物であると決めつけている事柄を神の属性と判断して、彼等の考えの誤解であることを主張しています、それからまた私は、私の知っている総ての人々の様には神を自然から離して考えていません」という件、⁽¹⁴⁾且つまたそのスピノザ書簡への謝辞を綴っているオルデンプルクの書状の中に、彼のクラブが「国王の好意で王立協会へ改組され、国家からの免許状を与えられました」という一六六二年七月一日の歴史的出来事の報告が見うけられることや、返書を拝受してから数週間も経過したのちに礼状を認めている旨を述べている記載事実⁽¹⁵⁾、或は更にまた、内容的には前記スピノザ書簡への再度の礼状並びに文通の再開依頼を構成していると思われる一六六三年四月三日付オルデンプルク書簡が、ボイルの病氣と彼自身の多忙から、数ヶ月にも及ぶ長期に渡った音信不通への謝罪で始まっている点、等々から察して、一六六一年の終り頃から一六六二年の初めにかけて作成されたものと推定してもよいと

ところで、「知性改善論」の構造内容を分析し、その特徴を把握しようとする場合、第一に、スピノザは哲学上極めて重要な方法論の執筆を完成する為の十二分な時間を持ち合わせていたにもかかわらず、何故未完のままに放置してしまったのかについての疑問を念頭におきながら着手する必要があるのではないのかと考える。この疑問こそ、「知性改善論」構図の核心を明らかにするように思えるからである。第二に、既に方法論を構築していたデカルトとベーコンの哲学上の欠陥に関して所見を述べている一六六一年九月付オルデンブルク宛スピノザ返書⁽²⁴⁾について注意する必要があると思える。即ち、彼は同書簡のなかで、彼等の「第一のそして最大の誤謬は、万物の第一原因 Causa prima 及び万物の根源に関する認識を持たなかったことであり、第二の誤謬は、人間精神 Mens humana の真の本質を認識していなかったことであり、第三は、誤謬の真の原因を把握していなかった点⁽²⁵⁾」に集約されると指摘し、而も更に、ベーコンは、特に、「ノヴム・オルガヌム」第一の四一・四八・四九及び五一で「人間の知性が諸感覚に欺かれる他、既に自己の本性そのものに依って欺かれ、一切を宇宙の姿に准えるどころか自己の本性に准えて把握するものと想定し、また人間の知性を、歪んだ鏡が諸物からの光線を不正に反射して自己の本性と物の本性とをまぜこぜにするのに例えたり、且つまた、人間の知性が抽象概念を形成することに傾き、⁽²⁶⁾変化的なものを恒常的なもの⁽²⁷⁾」と見がちである様に、誤謬の原因に関する彼の言説は非常に混乱していて、殆んど何事も証明することなくただ単に主張しているにすぎないと思えるし、此の問題に関する他の箇所は、総て容易にデカルト理論に還元される故、ベーコンについてはあまり申すことはなく、デカルト理論に対し polemic を集中したい旨、⁽²⁸⁾述べているのである。蓋し、スピノザが「知性改善論」をものするうえで、デカルトの方法論を強く意識していたものと思えるのである。

二 「知性改善論」の構造及び梗概内容

未完ながら「知性改善論」の構造は、内容的にみて、序論・総論及び各論の三部で構成されていると考えられる。即ち、「空虚で無価値な善」と「真実最高の善」について論じた道徳論的序論（一）～（一六）⁽³⁰⁾、「若干の生活規則」や「四つの知覚様式 *modi percipiendi* についての反省」に基づいて整理した最上の認識様式に関する詳細な説明（一七）～（二九）⁽³¹⁾、及び「真の観念や生得の力」という観点から形相的本質 *essentia formalis*（対象）と観念内的本質 *essentia objectiva*（観念）との認識論上の関係を明確に縷述した（三〇）～（三五）⁽³²⁾、また「最高完全者 *Ens perfectissimum* の観念に基づく最高善の認識方法の建設」、言い換えれば「知性が事物の真の認識に導かれる為の最善の道」の確立、を提供した（三六）～（四九）⁽³³⁾、の四セクションから成る総論、そして総論で論究された「真理の探究方法」を確立する為の具体的事項を検討しているのが各論である。それは、真の観念を表象力 *imaginatio* に起因する虚構 *factio* や虚偽の観念 *idea falsa* 及び疑わしい観念 *idea dubia* と混同することのないように峻別する方法を論じた（五〇）～（九〇）⁽³⁴⁾、永遠なる事物を認識する手段として、一切の個物が生起し且つ秩序づけられているところの法則たる確固・永遠な事物 *res fixae et aeternae* の系列について取り扱っている（九一）～（一〇五）⁽³⁵⁾、並びに、特殊的肯定的本質 *essentia particularis affirmativa* を条件として備えた真実且つ正当な定義を知性の本質・能力及びその特性についての明晰且つ判明な理解から導き出そうとしている（一〇六）～（一一〇）⁽³⁶⁾、但し（九一）～（九八）⁽³⁷⁾を含む、で構成されている。

以下に、三部門其其についての梗概内容を縷述し、スピノザが意図した方法論の特色及びその全体像を把握してみたいと思う。

(1) 道德論的序論について

スピノザは、青年期に現実生活で直面した精神的危懼についての自己告白的体裁でこの「知性改善論」を書き始めている。即ち、彼は、「方法叙説」におけるデカルトの如く、⁽³⁸⁾ 現実生活にうらうちされた感情についての内省という観点から、一般生活に於て通常遭遇するもの、特に人間の日常の行動から判断して人々が最高善 *summum bonum* と評価している富・名誉或は快楽等の如き事柄一切が本性上不確実な、空虚で無価値なものであり、場合によっては人間を滅亡へ到らしめるということを経験に依って教えられつつも、なお現実には容易にそれから離脱できないでいる苦痛、恰も或る対薬を施さなければ確実に死ぬであろうと自ら予見している危篤状態の患者の様な精神的衝撃を回想しているのである。⁽³⁹⁾ 彼は、このインパクトを回避する為に、人間のあずかり得る真の善で、他の総てを捨ててただそれに依つてのみ心が動かされるような或るものの探求、詰り、一度それを発見し獲得した上は、不断最高の喜びを永遠に享受できるような性質の事柄が存在するかどうかの探尋に取り掛かるのである。⁽⁴⁰⁾ 言い換えれば、彼は、直面した精神的苦痛を契機に、同一事物でも異なった関心に応じて、善いとも悪いとも、ただ相対的に判断が下されるにすぎない浮世の価値感から掛け離れた、永遠の秩序に従い一定の自然法則によって生起する完全な「本性」へ自らを導く手段となり得るものを真の善と定め且つその獲得を課題として、「知性改善論」の展開に取り掛かっているのである。特に、その場合、彼は、かかる本性(即ち真の善)を可能な限り他の人々と共に享受すること *es pervenire*,

ut ille cum aliis individuis, si fieri potest, tali natura fruatur を最高の善と規定し、⁽⁴²⁾而もそれを、「短論文」二部
二二章で論考された如く、⁽⁴³⁾Marcus Aurelius のストア思想の様に「精神と全自然との合一性の認識 *cognito unionis*
quam mens cum tota Natura habet」に求めよう。⁽⁴⁴⁾

斯くして、スピノザは、精神的苦痛からの救済を、啓示宗教理念から離れて、形而上学と物理学との基礎の上に構築された真と善との倫理的内的関係の明瞭な究明に求めているといってもよいと思える。

(2) 総論について

扱て、スピノザは、序の部分で問題提起した精神的衝撃の治療として真の善を認識する必要性を示唆したが、その認識へ到達する為の方法論の確立を「知性改善論」の課題として取り掛かることになる。彼は、方法論構築を目的として、ベーコンやデカルトに倣い、自然についての十分な理解、目的到達への適切な社会の形成、道徳哲学並びに児童教育の育成、全医学の整備、機械学の重視、等を必然的に要請するのみならず、⁽⁴⁵⁾まず何よりも先に、中世的推論式三段論法を廃止して主知主義的立場に立ち、⁽⁴⁶⁾知性の矯正及び浄化の方法 *modus mendiendi et expurgandi intellectus* の案出を必須条件として掲げている。詰り、彼は、その構築問題を「知性」の改善に還元し、知性作用としての認識 *perceptio* とこれに対する観念 *idea* との関係を明確に把握する為の方法の確定を前提とすべき「分析発見的な手続き」を熟慮しているのである。⁽⁴⁸⁾

斯くして、⁽⁴⁹⁾まず彼は、一切の知覚様式 *modi percipiendi* の分析作業を開始し、その結果をもとに、(一)聞き覚えから *ex auditu* 或は何らかの、所謂伝統または合意に基づく記号から得られる知覚、(二)偶然の出来事にすぎない

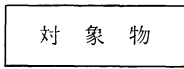
漠然たる経験から、言い換えれば、知性によって規定されない経験によって得られる知覚、(三)事物の本質が他の事物から結論される場合の知覚、(四)事物が全くその本質に依って、或はその最も近い原因の認識に基づいて得られる知覚、からなる四種の知覚様式を掲げ、而も更にそれらの内から最上様式の選択を試みている。⁽⁵⁰⁾ 例えば、第一図のように、三つの数が与えられていて、その第三数に対する関係が、第二数の第一数に対する関係に等しい第四数を求めようとする場合、普通に商人が第四数を見出すにはどうすべきかを知っているといえるのは、先人から証明なしにただ聞き覚えのままの手続きを忘れないでいるからである(第一知覚様式)、他の人々はしかし、極く簡単な数での、例えば二・四・三・六の場合の様に第四数が明白な数での経験から普遍的原則を作る、即ち第二数に第三数を乗じ、次にその積を第一数で除すれば六という商が生ずることを経験し、そしてこの手続きを経ずに既に比例数を知っていたと同一の数が今出たのを見て、彼等はその事から、これが常に第四の比例数を見出す為の正しい手続きであると結論する(第二知覚様式)、これに反して数学者は、ユークリッド第七巻の定理一九の証明より、どんな数が相互に比例をなすかを知る、詰り比例の本性及びその特性から、第一数と第四数の積が、第二数と第三数の積に等しいことを知るのである(第三知覚様式)、しかし彼等は与えられた数の比例関係を妥当には見ていない、そしてもし彼等がそれを妥当に見るとするなら、それは定理によってではなく、却て直感的に、何の手続きもなしに見るのである(第四知覚様式)。⁽⁵²⁾ これ等の内、彼は第一―第三の場合の如く、結果から原因を推論する様式には重きをおかず、第四を最上の知覚様式として選択している。⁽⁵³⁾ 彼によれば、結果を感覚し、それに基づいて原因を結論づけても、その原因の本質については何事も理解し得ないのである。⁽⁵⁴⁾ それは、例えば、我々が是の身体を感覚し、その他の何ものをも感覚しないことを明らかに知覚する時に、その事から直ちに、我々は精神

が身体と合一しているということ、そしてその合一がこうした感覚の原因であることを明瞭に帰結するが、しかし一体その感覚とか合一とかがどんな種類のものであるのかをそれから絶対に理解できない⁽⁵⁵⁾。物をその真の本質に依ってではなく、既述の様に抽象的に概念する時には、直ちに表象力 *imaginatio* に依って混乱されるからである。何故なら、その際人間は、それ自体では「一」であるものを「多様」に表象するから、即ち人間は、抽象的に、切れ切れに且つ混乱して概念したものに對して、他の最も親しいものに用いている名称を与え、其の結果として、初めにこの名称が与えられたものを表象するのと同じ仕方⁽⁵⁶⁾で、今度のものをも表象するからである。第四様式のみは事物の本質を妥当に把握し且つ誤謬の危険がないのである。

斯くして、彼は、抽象的普遍概念に依って事物の特有性 *propria* を把握することよりも、寧ろ個別的な事物の特殊的本質 *rei essentia particularis* の把握を目標としていたものと考えてもよいと思える。

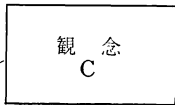
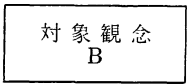
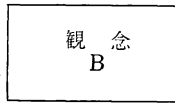
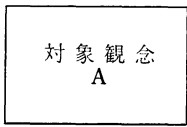
ところで、表象という心理的観点から、第一〜第三知覚様式に、言い換えれば經驗的知識に価値を認めないスピノザにあっては、結果的に、知性の範囲に、従って「觀念の本質の内に、知識の確実性」⁽⁵⁷⁾即ち眞の觀念 *idea vera* を求める必要があろう。事実彼は、それを対象 *ideatum* とは異なる、詰り形相的本質とは異なる觀念内的本質としての觀念に求めている。例えば、彼に従えば、円の觀念が円周と中心とを有するそれ自体實在的な或る円そのものではない様に、円と円の觀念とは別のものなのである。そしてその場合、觀念 *idea* がその対象 *ideatum* と異なる或るものであるからには、それは又それ自体において理解され得る或るものと思われる。言い換えれば、觀念はその形相的本質という方面からみれば、他の觀念内的本質の対象たり得るのである。そして更にこの別な觀念もまた、一つの形相的本質として他の觀念内的本質の対象となり得る⁽⁵⁹⁾（第二図参照）。斯くして、人は円が何であるのかを知っている

こと、またそれを知っている自分を知っていること、更にまたそれを知っている自分を知っていることを知っていることに気づく。⁽⁶⁰⁾ これからして確実な事は、円の本質を理解する為には、円に関する我々の観念そのものを理解する必要はなく、形相の本質を感受する様式、言い換えれば思惟の仕方そのものの中にこそ確実性が存在することになる。詰り、スピノザの場合、観念は、対象の表象 *representation* を意味するというデカルトの立場と異なり、⁽⁶²⁾ 実



自らの特殊の本質を持つ実在のあるもの

それが形相的に有する一切を自らの中に想念的に有するある他の観念の対象となる。



第二図

スピノザの「知性改善論」に関する一考察（藤本）

真理の標識 *signum veritatis* を求めると
 いう様な手続きには存在せず、却て真理そのもの、或は事物の観念内的本質を適當な秩序で求める為の道 *via* に存することになる。⁽⁶³⁾ 「真理は自己自らを明らかにする」⁽⁶⁴⁾ *veritas se ipsam patefacit* ののである。⁽⁶⁵⁾ 故、そこでは、真の観念の諸知覚から区別し、生得的に与えられた真の観念の規範に従って精神がどのように導かれるべきかを示す方法、即ち反省的認識或は観念の観念 *cognitio reflexiva aut idea ideae* の方法

が正しい方法であることになる。⁽⁶⁶⁾而も、真の観念は対象の観念内的本質であるという観点から、或は対象の観念内的本質と他の対象の観念内的本質との関係はそれらの形相的本質の間に存在する関係と同一であると考えられることから、最高完全者 *Eus perfectissimum* の観念の反省的認識こそは他の如何なる諸観念の反省的認識よりも勝れて最も完全な方法であると言い得る。⁽⁶⁷⁾蓋し、同じ観念論的立場から方法論の構築を目ざしたデカルトが *sum* の意識から出発しているのに対し、スピノザが最高完全者を真理明証性の起点としているのは、この為ではないのかと思える。斯くして、スピノザが「真理の観念はそれ自身ある叡知的なもの *per se aliquid intelligibile*」であると述べながら「知性改善論」の主題としているのは、この最も完全な方法の獲得であると言い得よう。⁽⁷⁰⁾

(3) 各論について

是迄、スピノザが方法論について総論的に纏めた道筋に沿って、先ず第一に、我々の一切の思想を方法論的主題へ向けるように努めるべき目的について確認し、第二に、我々が完全性へ到達する為に役立つ最上の知覚様式の概念について取り扱い、第三に、精神が正しく出発する為に辿らなければならない最初の道、即ち生得的に与えられた真の観念の規範に従った正確な諸法則に依って探究し続けて行くべき道標、について検討し、そして最後に、この方法は我々が最高完全者についての観念を得た場合に最も完全になるという見解を剖検して来た。

ところで、この総論に従えば、我々は、初めに可能な限り早く、こうした完全者の認識到達へ専念する必要があることになるのであるが、その為に、特に彼は、一、真の観念を他の一切の知覚から区別して、精神をそれら諸知覚から遠ざけること、二、未知の事物を明瞭且つ判明な認識に依って知覚する為の規則を与えること、三、我々の精神が

諸諸の無益なものから煩わされないように認識の秩序を立てること、の三項目を方法論の確立の爲の具体的且つ厳格な各論的要件として掲げている。⁽⁷¹⁾

扱て、第一の課題要件についてであるが、それは、具体的には、眞の觀念を他の諸知覚から區別し、分離して、虚偽の觀念、虚構された觀念或は疑わしい觀念を眞の觀念と混同しないように精神を抑制することにあるとスピノザは論述している。⁽⁷²⁾そしてその場合、彼が特に注意を向けているのは、各々の知覚の本質を取り上げ且つそれらをその最も近い原因に依つて説明しようとする試みに對してではなく、虚構された知覚、虚疑の知覚或は疑わしい知覚が何に關して生ずるのか、また我々は如何にしてその各々の知覚を回避することができるといった方法論が要求する題材についての講述に關してである。⁽⁷³⁾斯くして彼は、この点に留意しながら、先ず、虚構された觀念の検討に着手している。彼に従えば、一切の知覚は総て事物の存在及び本質に關わるが、虚構とは、内に確實性を包含する知性 intellectus 乃至真理認識とは全く異なる表象力、即ち感覺的知覚を起因とする表徴力、に依つて種々の混亂した曖昧な觀念を創作する精神作用または作り出されたその内容をいう。⁽⁷⁴⁾言い換えれば、それは、自然の中に存在する事物或はその本質や行爲に關する相互關係即ち主客の連関の有無が明確に把握されていない數個の觀念を合成することから生じる不安定な觀念である。⁽⁷⁵⁾従つて、「存在についての虚構」という点からみれば、私の知っているペテロが帰宅するとか、或は私邸を訪問するとかいう場合の様に、その事の本性上存在するとしても否としても何ら矛盾がない單なる「可能性に關するだけで、存在しないことがその本性の道理に合わないという「必然性」にも、或は存在することがその本性に矛盾するような「不可能性」にも、關しない自己自身の精神の産物である。⁽⁷⁶⁾また「全くの本質に關する虚構」についていえば、それは、精神が纏まつた事物或は多數の要素から成る事物を部分的にしか認識せず、また認識された

ものとされていらないものを区別しないということから、更にまた、各々の事柄に含まれている多数の要素に対して何らの区別を付けることなしに同時に注意を向ける為に生ずる。⁽⁷⁷⁾従って、虚構は決して新しいものを作り且つそれを精神に示すということはなく、寧ろ、単に頭脳或は表象力の中に存在するものが記憶に呼び戻され、そして精神がその回想された事柄総てへ同時に混乱して働くのである。⁽⁷⁸⁾例えば、「言葉」というものと「木」というものが記憶に思い起こされ、而もこれらに精神が区別なく混乱して作用する時、「木が話す」などと考えるのである。正しく、オビディウス⁽⁸⁰⁾のメタモルフォシス *Metamorphoses* ⁽⁷⁹⁾の中にみられる様に神までが動物や人間に変化したりする姿を思い廻すのである。⁽⁸⁰⁾或はまた、例えば、恰もアダムの本質を概念するのに一個の有であると一般に定義する如く、アダムの存在を単に一般的存在の形で概念しようとする場合には、同時に記憶に浮かぶ総てに対して容易に存在が帰せられる。⁽⁸¹⁾詰り、何かが抽象的に概念される時は、総ての普遍概念の様に、その概念は知性の中で常に、その概念の対象である個々物が実際に自然の中に存在し得ている範囲を越えて把握される。⁽⁸²⁾存在が一般的に、抽象的に概念さればされるだけ益々混乱して概念され、また益々容易にその概念が総てのものに帰せられるのである。⁽⁸³⁾斯くしてスピノザは、抽象的概念把握の方法を切り捨てて、或るものの本質と他のものの本質との間に存在する相違が、そのまま前者の現実乃至存在と後者の現実乃至存在との間に横たわるとの見解を立て、⁽⁸⁴⁾その視座から、存在が特殊的に、*particular* 的に概念されればされるだけ益々明瞭に理解され、且つまたその概念をそのものでない他のものに帰することが不可能になると帰結している。⁽⁸⁵⁾従って、若し觀念が部分的には認識され得ず、完全に認識されるか或は全くされ得ない程に最も單純な部分に分たれた事物に関するものなら、而もその場合、その各々別々に注意が向けられるなら、一切の混乱は消失すると思われる。⁽⁹⁶⁾なぜなら、若し最も單純なものであれば、デカルトの「哲学原理」の第一部四五から明らかなら

うに、それは明瞭且つ判明なものであり、従つてその存在が本性上真であるし、而も判明な諸觀念の合成から成るとすれば、その合成もまた明瞭且つ判明なものであり、故に真であると解されるからである。特に、彼は、この点について、「エチカ」一部定理三六にもみられるように、自然のうちにはその法則に反するものは何も無く、一切物は自然の一定の法則に従つて起こり、一定の諸結果は一定の法則に依り不動の連結に於て生じせしめられるという視座を設定しながら、半円の觀念と回転運動の觀念という單純觀念、及びそれらの組み合せて構成された半円の回転運動に依つて球の觀念 *conceptus* が形成されるという見解を例に掲げて説明している。⁽⁸⁸⁾即ち、彼は、半円の回転運動という、自然に沿つた運動を規定する原因の觀念から生じもしなければ、半円の觀念のなかに含まれてもいない觀念は、それ自体では虚偽性を有するが、球の觀念即ちこの様な運動を規定する原因の觀念と有機的全体をなして結びつく場合、それは單純な觀念の單なる合成という点で、球の觀念と相おおい、その觀念以上には及ばず、却て球の觀念を表現することになる。⁽⁸⁹⁾兎にも角にも、最單純で明瞭に觀念される事物並びに其の合成からなる存在や觀念が本性上永遠の真理であるなら、こうした事柄について我々は何も虚構し得ないし、仮令事物の存在が永遠の真理でない場合でも、事物の存在とその本質とを比較するとともに、自然の秩序に注意を払えば、虚構を免れることができることになると推論している。⁽⁹⁰⁾これからして、精神は物を真に或は最單純に觀念するや、引き続き同一の諸結果を觀念内的に形成して行くことが帰結されることになる。⁽⁹¹⁾

ところで、スピノザは、虚偽の觀念についての特徴を、虚構された觀念とそれとの差違を提示しながら、明らかにしている。それは、表象像が心に浮ぶ時に、虚構の場合にはこの表象像が自分の外に在る事物から生じているのではないということを判断することができるが、虚偽の觀念の場合にはその原因が意識されていない為にそうした判断を

下すことが不可能であるということである。⁽⁹²⁾虚偽の観念は目を開いて即ち醒めながら夢を見ているのと殆ど異ならない状態を意味する。言い換えれば、それは承認を含む虚構の観念に他ならないということである。⁽⁹³⁾従って、虚偽の観念は、虚構の場合と同様、本質の認識されている事物の存在に対して起こるか或は本質そのものに関係するからであり、それ等の虚偽を矯正する為には、虚構の場合と同様の方法を用いなければよいということが帰結される。⁽⁹⁴⁾但し、虚偽の観念は虚構の場合と異なり、表象力において現われる事柄が知性においても存在する場合の認識について注意を払う必要があると思われる。というのは、この場合、確実性を具えた真の観念は不判明な観念と混同されてしまうと思われるからである。スピノザはこの事に注意してか、虚偽即ち錯誤は本来の対象において概念するところの事柄を他の物にも適用して事物を抽象的に概念するのみならず、全自然の第一の要素言い換えれば自然の源泉と根源とを理解せず、その為秩序を踏まずに思惟を進めて、自然を真ではあるが抽象的な公理と混同する結果、自分自身混乱してしまい、自然の秩序を転倒するようにすると警告しながら、漠然たる経験に依って得られるものに対して用心しつつ、我々の一切の知覚を与えられた真の観念 *data vera idea* の規範に従って吟味すれば、その混同は避けられると断じている。⁽⁹⁵⁾

扱て、スピノザによれば、例えば、月が太陽よりはるかに大きいと感じ且つ考えるような経験的感官の欺瞞について思惟する様な場合に疑惑が生じる。⁽⁹⁶⁾即ち疑惑は懷疑心が抱かれるものについて、或る明確な事を結論できる程に明瞭且つ判明でないところの他の観念に依って生じる。⁽⁹⁷⁾蓋し、それは或る事柄に対する肯定に関する判断の停止に他ならない。従って、既述の天体に関する疑わしい観念についていえば、疑惑の後に、感官についての真の認識を得て、事物の距離と感官の媒介機能について知る時、疑惑は除去されると考えられる。⁽⁹⁸⁾斯くして、彼は、デカルトが *Medita-*

tions で熟慮した故く、初めに探究すべきことを、何ら事物の連結を中断することなしに正しく探究し続け、且つ問題の解決に取り掛かる前にこれをどのように規定すべきかを知るならば、人は最も確実な観念しか、言い換えれば、明瞭且つ判明な観念しか持たないことになり、結果的に、疑わしい観念を回避することにもなると論述している。⁽⁹⁹⁾

以上、是迄、虚構された観念や虚偽の観念或は疑わしい観念からの真の観念の区別を、単純な観念或はそれらの合
成からなる観念についての省察を基にして遂行しているスピノザの理論を分析してきたが、そこでは、真の観念が主
客の関連を自己自身の内に能動的に含む明晰判明な性質を示しながら、認識されている事象の根源を明確に把握して
いるのに対し、他の諸知覚は、身体が種々の刺激を受けるにつれて、漠然と記憶のなかで合成される一般抽象的な記
号の様に、精神の能力自身からではなく外的原因から受動的に生ずるところの偶然なそして連結のない諸感覚即ち表
象力に起因するという、謂ば St. Thomas Aquinas の Summa Theologica や、カルトの Les Passions de l'Âme
で熟考されているような表象認識を意味するという見解が展開されているのを把握してきた。⁽¹⁰⁰⁾

ところで、次に、純粹理性 *purus intellectus* から生じる明晰判明な観念に依ってあらゆる事象を認識する為に定
められた規則及びその認識の秩序に関する分析について、即ち各論の第二・第三の内容剖検へ作業を進めることにす
る。⁽¹⁰¹⁾特に、スピノザは、これ等各論を検討するにあたり、先ず、それ等が共に指向すべき目標を設定するとともに、
書簡四で論じている様な、明瞭且つ判明な観念乃至物の本質と同視し得る「定義」の概念を用いて、その目標に達す
る為の手段について明らかにすることから取り掛かっている。⁽¹⁰²⁾彼は、純粹理性から来る一切の観念を検討し、それ等
を連結し、秩序づけ、以て総ての観念を一つに還元することに依って、我々の精神ができる限り自然の形相性をそ
の全体に關しても並びにその部分に關しても *quoad totam et quoad ejus partes* 観念内的に再現し得るように努め

ることに目標を設定しているのである。⁽¹⁰³⁾ その場合、事物が全くその本質のみに依って概念されるか、それともその最近原因に依って概念されるかが重要である。若し自己原因 *causa sui* として存在するなら、それは全くその本質に依って理解される必要があるし、これに反して、存在の為に原因を要するなら、それはその最近原因に依って理解されなければならない。何故なら、実際、結果を認識するということは、原因についてのより完全な認識を得ることに他ならないからである。⁽¹⁰⁴⁾ 従って、我々は決して抽象的普遍的概念即ち理性の有 *ens rationis* から実在的事物を結論したり、逆に実在的事物から抽象的概念を導き出してはならない。⁽¹⁰⁵⁾ 寧ろ或る特殊の肯定的本質 *essentia particularis affirmativa* を表わす、真実且つ正当な定義から結論を下す必要がある。というのは、根本的にみて、知性は單に普遍的公理のみから個物へと降下することが不可能なのである。⁽¹⁰⁶⁾ 彼の見解では、公理は無限の範囲にまで及んでいて、或る個物を考察する場合、他の個物を分析する時よりも多くの知性を規定するということはなく、その結果、何ごとかを発見する為の正しい手段は、ある与えられた定義から諸諸の思想を形成して行くことにある。⁽¹⁰⁷⁾ 斯くして、ここでは良き定義の条件を認識することが極めて重要になると思われる。事実、彼は、「定義が完全といわれる為には、事物の内的本質を必然的に明らかにしなければならない、本質の代りに或る固有性 *propria* を以てすることのないように注意を払う必要がある」と前置きしながら、「創造された事物 *res creata* を定義する場合」に守るべき二条件、即ち、一、定義は最も近い原因を包含しなければならないという項目や、二、事物の概念としての定義は他のものと結びつけずにただそれだけを見て、それから事物の総ての特性が結論され得るようでなければならないという条項を掲げ、⁽¹⁰⁸⁾ また「創造されない事物 *res increata* の定義の場合」として、一、定義は一切の原因を排除しなければならないという要件、二、一度その事物の定義が与えられた以上はそれが存在するかどうかという問題の起こる余地があつては

ならないという必然性、三、「短論文」一部一章の注三、二章後段及び三章の注、等で取り扱っている様に、定義には少なくとも意味の上では *althanks naar den zin* 精神に関する限り *quoad mentem* 形容詞にもなされ得るような名詞を含んではならないこと、四、定義からその事物の一切の特性が結論されることを要するという項目、から成る四箇条を提示している。⁽¹¹⁰⁾ 斯くしてこれらの条件に従えば、彼にとつての定義は、事物の實在的可能性を把握する概念であるとともに、事物の内的本質乃至内在的構造をそれ自身から或はその最近原因から必然的に且つ *génétrique* に明らかにするものでなければならぬと考えられ得る。

扱て、彼は、我々の総ての知覚が秩序づけられ且つ合一される為には、理性の要求するところに従い、万物の原因であつてその觀念内的本質が同時に我々のあらゆる觀念の原因であるようなある事柄が存在するかどうか、またそれがどのようなものを探究する必要があると指摘している。⁽¹¹¹⁾ というのはその場合、我々の精神は自然の本質・秩序・合一性を觀念内的に含むと想定されることになり、そうすれば、その精神は最も完全に自然を再現することになると考えられるからである。この点に立てば、我々の一切の觀念を常に自然的事物乃至實在の有から導き出すことが何よりも必要とされよう。彼が、できる限り原因の系列に従つて一つの實在の有から他の實在の有へと進むことを強調しているのもこの為である。⁽¹¹²⁾ 彼がここで原因の系列とか實在の有の系列とかいうのは、変化する個物の系列のことではなく、「エチカ」や書簡六四で論じられている無限様態と同様な性質を持つ、確固・永固な事物 *res fixae et aeternae* の系列を差している。⁽¹¹³⁾ それは、神に直接依存し、永遠からこのかた存在し、総ての個物はこれに依つて生じせしめられ、個々物一切の最近原因であつて、変化する個物を定義する為の類 *genera* の如きもの *tunquam*、即ち「短論文」でいう普遍的な所産的自然に相当する。⁽¹¹⁴⁾ 彼に従えば、変化する個物の現象系列は無数にあるし、また同一事物内に於

でも無限に多くの事情があつて、その各々がその事物の存在または不存在の原因たり得るもので、無力な人間にとつてそうした変化する個物の系列を十二分に捕足することが不可能である。⁽¹¹⁵⁾事物の本質は実にただ確固・永遠な事物から、同時にまた、それは真の法典として各々の事物の中に刻み込まれている所の系列法則、言い換えれば、それに従つて一切の個物が生起し且つ秩序づけられている所の仕組からのみ求められ得る。⁽¹¹⁶⁾而も変化する諸諸の個物は内的に且つ本質的にこうした確固たる事物に依存し、後者なくして前者は存在することも概念されることも不可能なのである。⁽¹¹⁷⁾

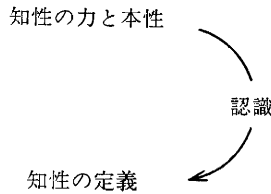
斯くして、ここでは、永遠な事物の認識に到達するのに必要であり、また既述の条件に従つてその定義を形成するのに要求される事柄についての検討が重大な問題となる。若し我々が万物の中の第一のものを探究しようとするなら、我々の思想をそこへ導く或る基礎、即ち出発する為の最初の認識が必然的に与えられる必要があるからである。

彼の理論では、「精神がある思想に対して、これを検討し、それから正當に導き出される諸諸の結果を正しい秩序に従つて導き出すことに努める場合、若しその思想が偽であつたなら、精神はその思想の虚偽性を看破するし、逆に真実であつたなら、何らの中断なしに首尾よくそれから諸諸の真なる觀念を導き出し続けて行くことが出来る」という基礎に基づいて我々の思想は規定され、而も、特に方法は反省的認識に他ならないから、我々の思想を導くべきこの基礎は、真理の形相を構成するものの認識、及び知性の本性乃至力の認識を意味することになる。⁽¹¹⁸⁾

詰り、実際に、この認識が得られれば、我々は自己の思想を導き出す基礎を持つことになり、また知性が其の能力の及ぶままに、永遠な事物の認識に到達し得ることになるのである。⁽¹¹⁹⁾

従つて、そこでは、知性の力ないし能力を概念的に如何に把握すべきであるのかという課題が重要とならう。知性

の力とその本性を最も良く理解することが方法の主要部分であるとすれば、この節の前半で検討したところにより、それらの概念を必然的に思惟乃至知性の定義そのものから導き出す必要があることになると思われる。だがしかし、彼の見解では、是迄我々はまだ定義を発見する為の何らの規則も持たなかったし、而もそうした規則を立てるには、⁽¹²⁰⁾ 先ず、知性の本性即ち定義とその能力とが認識されなくては不可能である（第三図参照）。彼はこの循環論的矛盾を意識してか、「我々が明瞭且つ判明に理解するところの知性の諸特性に注目すれば、知性の定義はおのずから明らかになる」と述べている。彼にあっては、知性の諸特性は、知性から生ずる一切のものと同様、先ず、その本性が認識されなくては明瞭且つ判明に知覚することが出来ない性質のものなのである。そして、彼はこうした視座から、知性の諸特性を列挙しているのである。即ち、知性の諸特性とは、



第三図

- I 知性は確実性を包含する。
- II 知性はある事柄を絶対的に知覚する。
- III 知性が絶対的に形成する観念は無限性を表現する。
- IV 知性は否定的観念よりも、先ず、肯定的観念を形成する。
- V 知性は事物を持統のもとによりも、或る永遠の種のもとに *sub quodam specie aeternitatis* 及び無限数のもとに認識する。

VI 我々が明瞭且つ判明に形成する観念は我々の本性の必然性だけから生ずるように見え、絶対的に我々の能力にのみ依存する観がある。

VII 知性が他から形成する事物の観念は、精神によって種々の仕方限定され得る。

Ⅷ 観念は、その表現する対象の完全性が大であればあるだけ完全である。

の八ヶ条から成る。⁽¹²⁾これら諸条項を貫いているのは、特にⅠ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵから察して、「改善論」の核となる知性の力や本性は最高完全者の観念から出発し、「形相的本質」と対応する「観念内的本質」そのものの幾何学的展開をもとに、永遠存在的な対象を認識することを主要任務とするという内容の理念であるといえる。言い換えれば、真なる観念の自立性への確信を抱いて、事物を持続のもと *sub duratione* ではなく、永遠の種のもとに *sub quadam specie aeternitatis*⁽¹²³⁾知性への絶対的な信頼をおきながら把握するという理論であると解し得る。従ってここでは、結果的に、心理学的に個体認識に対する十二分な配慮を欠くことになるのではないのかと思える。ところが、彼は、この永遠な存在の対象認識と個体認識との対峙関係に何も触れることなく、この八ヶ条を提示した後、突如、この著を未完のまま放置してしまっているのである。

三 未完要因の検討

Tschinhaus がスピノザに書簡を送り、「貴殿の執筆されている、未知の諸真理を探究するに際しての理性の正しい指導法……を何時聞くことができるでしょうか」と尋ねている事実⁽¹²⁴⁾、或はイエレスに依って執筆添付されたと思われる「知性改善論」の序文に、スピノザが最後まで完成を望んでいたという内容が述べられている件、等から、彼は執筆完成の願望を強く抱きながら、同書を未完のままに放置してしまったものと想定し得るが、それは彼がそうしたければならなかった程に重大で解決不可能な諸要因が内外的に在った為ではないのかと推測される。そこで、そうし

た要因の摘出作業に取り掛かるのであるが、この作業こそ、「はじめに」でも触れたように、「知性改善論」の本質を明白に説き明かすうえでの key point になるのではないのかと思えてならない。

ところで、真理の形相を構成する觀念の連続と秩序を基に、知性が特殊の本質としての個物存在の認識を定義に依つてどのように導き出して行くのかという⁽¹²⁷⁾、方法論を構築する上で極めて重要な問題を縷述し始めた所で、突如、筆を措いている点から鑑みて、例えば、スピノザが独自の哲学を公表すれば、全く神についての觀念を異にする神学者達からの迫害を蒙り、思索生活が乱されるのではないのかという恐れがあった事や、第二書簡の付録或は「短論文」の付録から察せられるように、彼は、「知性改善論」を執筆開始した当時既に、形而上学のみならず道徳論、物理学及び心理学を含む自己の思想体系を幾何学的叙述方式で構築しよう意識しており、「知性改善論」として最初に構想していた後半部分を普通の形式で論述するには興味が薄れ、改めて「エチカ」⁽¹³¹⁾として根本的に論述しなおそうとしたものとする想定、或はまた予想以上に早く彼に訪れた死期の為と推測するような考えられ得る限りの外的要因を未完の主要な原因として判断するには少々無理があると思われる。というのは、彼が後半部として構想していた形而上学についての執筆中止の理由は別として、認識方法の確立を試みた前半部の未完に関する合理的説明が不十分であるからである。⁽¹³²⁾従って、寧ろ、「知性改善論」の内容的破綻が未完の原因であると解釈すべきではないのかと考えるものである。

扱て、そこで、内的要因についての検討に着手するのであるが、それは次のような主な三つの理論的矛盾にあるのではないかと思える。即ち、先ず第一に考えられるのは、彼の用いた理論構成の副作用に依つて生じたと推測される「定義と知性の循環論的矛盾」を解決しようとして試みた思索である。前章の(3)で把握した様に、彼は、個物の本性

の認識を問題にするにあたり、その本性を認識するには我々の精神が自然の本質・秩序・合一性を観念内に包含する状態を構築する必要がある⁽¹³³⁾、その為には反省的認識語り観念の観念という真理探求の法則の基礎となる確固・永遠なる事物から或はその系列から導き出す必要があるとしたが、その事物乃至系列を認識する場合、先ず、我々の知性の本性と能力との理解が要求され、而もその理解の為には知性の定義を得なければならず、更にまたこの定義を得るには再び知性の本性と能力とを認識することが要請される⁽¹³⁵⁾といった循環論に陥ってしまっているが、この終りのない矛盾した循環から免れようとして、「若し我々が明晰判明に理解するところの知性の諸特性に注目すれば、知性の定義はおのづから明らかになるであろう⁽¹³⁷⁾」という見解を立てて、事物の諸特性を認識してからその本質を定義として把握するという方法を論述しているのである。この解決方法は、事物の特有性はその本質が理解されなければ正しく認識されないという視座⁽¹³⁸⁾、即ち、「中心から円周へ引かれた諸線の相等しい図形である⁽¹³⁹⁾」という円の特性は「一端が固定し他端が運動する任意の線によって画かれた図形である」というその本質が定義されて始めて理解されるように、先ず事物の本質を知って、次にその観念を基にしてその物の諸特性を推知していくという謂ば彼が「知性改善論」全体を通して厳格に組み立てて来た認識上の系列、を自ら毀す結果になるのである。第二に指摘し得るのは、定義の根源の不明確な点である。彼は、知性を媒介にした最高完全者の観念の反省的認識規範に従って精神が己れ自らを真理として主客の対立を止揚するという論理⁽¹⁴⁰⁾、言い換えれば、自己適及性を包含する「精神の概念としての観念⁽¹⁴¹⁾」の真理性が観念自体のうちにその標識を持つという見解⁽¹⁴²⁾、Regulae及び「方法序説」第二・第三答弁を引用して構築したと思われる「観念が最単純であれば明晰判明であり、真である、また単純な諸観念からの合成乃至導出によって綜合された複雑な観念もまた真である⁽¹⁴⁵⁾」という視座、及び知性が直径を軸にして回転する半円の観念と運動の概念とを綜合して球の概念

を作り出すという例等から、観念を形成する度に我々はそれを他の観念から演繹し、同時にそれから新しい観念を演繹していくというように知性の総合的活動は同時に演繹の過程に他ならないと解釈している。而も彼は、この知性の演繹活動という観点から、「自然の形相性をその全体に関してもその部分に関しても観念内的に再現するように」諸観念を連結し、秩序づけて、有機的全体観即ち「精神が全自然と合一していることの認識」への到達を試みているが、その場合、「何事かを発見する為の正しい道は或る与えられた定義から新しい思想を形成していくことにある」と述べて、演繹がなされる最初の対象としての観念を定義に求めている。従って、知性の総合性を確実なものにする為にはその構成要素の真理性が明瞭でなければならないはずであるが、言い換えれば、その要素となる定義が如何にして成立したのかを分析発見的手続で明らかにする必要があると思われるが、デカルトが cogito の存在性に関して方法論的に不問にした為に彼の形而上学までも不確実なままにしてしまった様に、スピノザもまた、この手続きを無視して、定義の根源が不明確にもかかわらず、既に明晰に発見されているものとしてそれを取り扱っているのである。第三に掲げ得る要因は、有限な個物と永遠な事物との間に方法論的には越えられない深い「溝」を生じせしめたことである。即ち、彼が「精神と全自然との一致」を認識する為に初めに掲げた主要課題は、有限な存在者としての人間が自己の知性を改善・浄化して真の観念乃至確固・永遠な事物の認識へ何様にして到達し得るかの検討であったが、「知性改善論」で最終的に到達した彼の方法論的理念は有限事物とは掛け離れた、形相的本質と観念内的本質とが内的に連関せしめられている永遠な事物の演繹的自己展開であったのである。ここでは、有限な我々の存在から確固・永遠な事物を認識していくという方向へ進む思索と我々に生得的に具った intellectus infinitus を通して確固・永遠な事物が自己を哲学的に開示していくという思考方法との全く方向の異なる二種の方法論が対時的に同次元に同

居しているのである。恐らく、凡神論的立場に立つ彼としては、結局、後者を選択し且つ思考方法として採用したのではないのかと思える。従って、我々の精神を諸諸の錯誤から回避して真の善の認識を獲得する方向へ即ち「精神と全自然との一致」⁽¹⁵⁹⁾の認識へ導く為に、ただ単に、人間の知性の範囲内で自己の精神を改善・浄化するだけでは不十分ではないのかと推測する。彼はこの問題を意識してか、突如、人間の欲望を満たす為の便宜性の度合を基準にして下される「相対的で不完全且つ主観的な日常の価値判断」⁽¹⁶⁰⁾を捨象する為に厳しく否定したはずの感覚と経験との援用をあげて、現実的個物と永遠な事象との間に bridge を構築しようとしているが、不完全なままになっているのである。

ところで、これら三つの理論的矛盾こそは、彼が最初に方法論を構築しようとして「知性改善論」を計画した時点では想像することもできなかった程に重大な問題となつて、執筆中の彼の意識へ伸し掛り、終には仕事への断念を彼に余儀なくしたのではないのかと推察するのであるが、それ等のうちでも、特に第三の問題は、「知性改善論」の中斷ばかりか、他の機会に詳述するつもりであるが、彼の形而上学を研究するうえで生じる疑問、即ち、有限状態の有限性の根拠が全自然の根源であるはずの無限な神のうちには見い出されないのかという疑問、また実体そのものの本質を表現する属性の並立は絶対無限な神の不可分性と矛盾するのではないのかという問題⁽¹⁶²⁾、を取り扱う場合、方法論的にスピノザの哲学体系の破綻をも招きかねない大問題を生じせしめるはめに陥るのである。

四 未完要因の根源

扱て、是迄、未完の要因を内容的欠陥に求めて、主な理論的矛盾を指摘し、「知性改善論」の全体像を謂ば裏側から、

検討してきたが、より重大なことは、欠陥内容の列挙よりも、寧ろ、何故彼の方法論がそのような矛盾を含んでしまったのかについての検討であろう。第三章での分析から察して、その原因は彼の用いた方法論の制約にもとずいてい
るのではないかと思えてならない。

「知性改善論」で問題になっている方法論の秩序は、知性が何の手続きを経ることもなしに、直感に依って発見する観念、即ち全くその本質のみで真なるものとして観念される認識を、第一真理として基礎に持ち、それから総ての真の観念が演繹的に相互に導き出されて、総合的な体系を構築するという性質のものである。⁽¹⁶³⁾ そういった意味で、それは、諸研究家が指摘している如く、⁽¹⁶⁴⁾ 何幾学的秩序をさすものと解すことができると思う。

ところで、スピノザの幾何学的方法に関しては二種類の解釈がある。その一つは、彼の用いた演繹の統一性乃至幾何学的形式は、外面的であり、真理探究の方法ではないと判断する Joachim や Léon Brunschwig 或は H. A. Wolfson 等の見解、⁽¹⁶⁵⁾ 他は、彼の幾何学的方法の中に、精神の目として具体的な概念の自己生成を認めようとする H. F. Hallett や C. Gebhardt の視座⁽¹⁶⁶⁾である。しかし、「知性改善論」を分析する限りでは、前者の見解は少々妥当性を欠くと思われる故、後者の視座に立つべきではないのかと考える。というのは、幾何学的方法の雛型として、「点とは部分を持たないものである」という点の定義から始まり、前提されたものを形式的或は外見的にただ説明して行くユークリッドの「原論」⁽¹⁶⁷⁾に見い出すことができるが、しかしスピノザはユークリッド幾何学的方法をそのまま採用し、その立場から、「創造されないもの」を第一定義として、自己の論理を展開しようとは試みていないのである。寧ろ、彼は真の観念を他の諸知覚から区別し、分離して、虚偽の観念や虚構された観念及び疑わしい観念（——それらは表象像に基づく）と真の観念とを混同しないように精神を抑制することを真の方法論を構築する為に課せられた一要件として

掲げながら、ユークリッド第七巻、定理一九を不可知な表象像にすぎないものとして、「最善の知覚様式」から捨象さえているのである。⁽¹⁶⁸⁾蓋し、スピノザは、「原理的反省」の立場から、ユークリッドの表象的幾何学的方法を哲学的方法へと決定的に変化せしめる必要があったのではないのかと思える。また、スピノザは、運動概念を幾何学化し、⁽¹⁶⁹⁾哲学的厳格な保証を与えようとしたデカルトの解析幾何学をそのまま引用しているとも考えられない。即ち、デカルトは、「神は運動の第一原因であり、宇宙のうちに常に同じ運動量を保持している」という命題のもとに、神があらゆる瞬間に連続的に物を創造する故、物が運動するという見解を立て、⁽¹⁷⁰⁾且つその視座から、連続した物体を「長さ・幅・高さまたは深さにおいて無限に広がり、そして種々の形と大きさを持ち、どんなふうにも動かされ、位置を変えられることの可能な、様々な部分に分割することのできる」空間と同視して、⁽¹⁷¹⁾言い換えれば、運動を二点間の空間を連続的に占有する物体と解釈して、運動の概念を空間化乃至幾何学化し、⁽¹⁷²⁾而も更に、それを座標軸を用いた関数へと転化して、「方程式の根の値を求める」というような問題へ還元しているが、この論理に立てば、自然事象の説明については数学的厳格さをもってある程度対処できると推測し得るものの、形而上学の世界における運動性を無力化し、空間として形式化或は抽象化してしまう恐れがあり、とうてい「神即自然」の凡神論的立場に立つスピノザには継承できない論理方法なのである。

扱て、スピノザにとって、幾何学的秩序を形而上学へ応用しようとする以上、デカルト以上に幾何学と哲学との全面的な融合の実現が必然的に重要な課題となってくると考えられる。彼はこの問題に対処する為、デカルト理論を反省的に引用している。即ち、彼はデカルトが「省察」の第二答弁、「方法序説」の第二・第三規則及び「レグラエ」第五規則で論述している分析的方法 la méthode analytique と総合的方法 la méthode synthétique に着目し、⁽¹⁷³⁾且つ

懷疑的分析方法を用いたデカルトとは正反対に、綜合的方法を自己の哲学方法として採用しながら、直感に依って得た総てのうちで最も単純なもの詰り「創られないもの」乃至確固・永遠な事物の觀念を基底にして、それから、知性が他の総ての単純なものの認識へと同じ段階を経て到達し、更に、複雑なものの觀念へと進んで、最終的に綜合的な体系を創り出すという見解を立てて、演繹的秩序を幾何学的空間として規定しようと試みているのである。⁽¹⁷⁶⁾蓋し、彼は「創られないもの」の無限性が精神として力動的に現われている状態を空間として幾何学化しようと図っているのではないのかと思える。

ところで、知性の活動を通して、「創造されるもの」の総ての眞の觀念が「創造空間」に依って与えられるという幾何学と哲学との同一化を基礎づけようと試みたスピノザの思索に、言い換えれば、この同一化という路線上で構築を図った方法論の制約に、残念ながら、本稿第三章で検討した様な諸問題が根ざしているのではないのかと思える。というのは、田辺元教授が指摘する如く、定義そのものの根拠の不明確さ、或は根本概念に定義を与えようとする場合に生じる困難さは一般公理体系に根源的に内在する制約によるものであり、⁽¹⁷⁷⁾また、普遍眞理が現われている幾何学的系列に基づいた部分と全体との空間関係からは、方法論的な制約上、具体的特殊的個物を捉えることは不可能であろうと思えるのである。

五 おわりに

この小品を締め括るにあたり、「知性改善論」の意義について記述することにする。同著は、是迄、既に検討してスピノザの「知性改善論」に関する一考察（藤本）

きた様に、方法的制約から論理的欠陥を含み、未完のままに放置されてしまったものと推測されるものの、スピノザが「我々の精神と全自然との合一の認識」[cognitio unionis quam mens cum tota Natura habet] ⁽¹⁷⁸⁾を獲得することを目的として掲げ、その遂行の為の方法として、ユークリッドやデカルトの幾何学に比べて哲学的により改良された形としての演繹的秩序、言い換えれば、形而上学に全面的に結合された姿としての幾何学的秩序、を構築しようと大胆に計画した作品であると考えてもよいと思える。それは、方法的構築過程で、遂行すべき課題として掲げた項目、即ち「誤謬一般の起源についての認識」、「知覚された対象」としての觀念内的本質と「知覚される対象」としての形相の本質との平行関係、生得の力、觀念の觀念、真なるものの形相、知性の本質・能力及び諸特性、等に関する分析作業や認識方法に「確固・永遠なる事物」という思想を導入する仕事を通して、帰納的方法の観点に立つベーコンやsummaを基点とした懷疑主義的分析方法を取るデカルトとは理念を異にする立場からの方法的構想を意味するものであったといつてよい。まさにDittoが指摘する如く、スピノザの目ざした方法は、単なる延長の幾何学的方法に止まらず、更に存在の幾何学となり、精神の幾何学にまで高められているのである。⁽¹⁷⁹⁾

擬てWolstonは、スピノザの著作形式について、彼の論述はプラトン、アリストテレス、キケロ等の歴史的に顕著な著作形式を実験的に自己の方法に取り入れている形跡が見うけられる、彼が幾何学的形式に従って論述したのは「短論文」の付録、「デカルト哲学原理」及び「エチカ」丈であり、他は例えば「知性改善論」はデカルトの「方法叙説」に従い、「神学・政治論」はユダヤ教やキリスト教が伝統的に用いて来た聖書注釈方法を思わせ、「短論文」の第一部、第二章と第三章との間に挿入されている対話形式は「プラトンの対話篇以後試みられて来たものの実験的な方法的探究としてみることが出来る」⁽¹⁸⁰⁾と指摘しながら、スピノザが自己の哲学的見解を表明するのに幾何学的形式を

取らねばならない必然性はなく、当時の幾何学的方法の全盛の時代に、啓蒙的な意味でその範を示したものにすぎないと想定して、彼の方法論の構築の意義を消極的に評価している。しかしながら、拙稿「私のスピノザ研究の覚え書き⁽¹⁸²⁾」で検討した如く、内容的に「短論文」のより発展された形で「エチカ」が構成されていること、「知性改善論」の執筆時期が「短論文」と「エチカ」の中間にあたるという事実⁽¹⁸⁴⁾、及び「エチカ」が何の序論的叙述もなく、突如、第一部「神について」と題して、八つの定義・七つの公理・三六の定理及び若干の備考で、「自己原因」・「自己の類における有限」及び「実体・属性・様態」に関する内容を演繹的な幾何学的秩序で論じていること等から察して、「知性改善論」は「エチカ」の用いた幾何学的方法の準備や序論的役割と、「短論文」の内容をより発展せしめる機能的役目を果たしたのではないのかと推量し得る。蓋し、スピノザは幾何学的方法が自己の哲学表現に極めて都合のよいものと積極的に判断し、その構築に着手したものである。

なお、今後の研究課題として、スピノザは、「知性改善論」を未完に放置しながら「エチカ」を幾何学的方法で叙述しているが、前者で直面した問題を「エチカ」ではどのように解決しようとしているのかについての検討や、「デカルト哲学原理」、「短論文」の付録及び Ordenburg 宛て書簡第二の付録で用いられている幾何学的叙述方法の比較分析が残されている。別の機会に論ずるつもりである。

注

一はごめじ

(1) 此の書の本来の名称は Discours de méthode pour bien conduire sa raison et chercher la vérité dans les sciences, plus la dioptrique, les météores et la géométrie, qui sont des essais de cette méthode である。Oeuvres de Descartes

スピノザの「知性改善論」に関する一考察（藤 本）

- VI, ed. Charles Adam and Paul Tannery, Paris, 1973, 以後 Discours と略記する。
- (2) F. Bacon, Opera Omnia, quattuor voluminibus, London, The Works of F. Bacon. J. Spedding, R. L. Ellis, and D. D. Heath, London, 1963, Novum Organum.
- (3) Carl Gebhardt, Spinoza Opera II, Tractatus de intellectus emendatione, et de viâ, quâ optimè in veram rerum Cognitionem dirigitur, Heidelberg, 1925. 以後 TDIE と略記する。この文献読解の基は『Philosophische Bibliothek, 95, Hamburg, 1967 & Edwin Curley, The Collected Works of Spinoza I, Princeton University, 1985及び「知性改善論」崑中訳解説、岩波文庫、一九七九年等を参考とした。以後、主要文献については Gebhardt 版及び崑中訳を掲げる。
- (4) Frederick Copleston, Medieval Philosophy, London, 1952, pp. 25~41, pp. 60~68, pp. 84~99. D. J. B. Hawkins, Medieval Philosophy, Oxford, 1960.
- (5) 竹内良知著「スピノザの方法について」第三文明社、一九七九年、一一六頁。
- (6) 経験主義者として F. Bacon や J. Lock・懷疑主義者として R. Descartes・数量的観察を重視する機械論的自然主義者として T. Hobbes を掲げるようにある。なかへ、宗教と自然界或は医学と自然界を追求した神秘主義者として T. B. Paracelsus と G. Bruno を指摘する。W. Dilthey, Auffassung und Analyse des Menschen im 15 und 16.
- (7) 桂 寿一著「西洋近世哲学史」、岩波全書、一九八二年、六二一～六三頁。
- (8) Pensée de B. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, Qui ont esté trouvées apres sa mort parmy ses papiers, Luxembourg, F. Kaplan, Paris, 1982, L III B 339, L 113 B 348, L 149 B 430, L 200 B 347, L 756 B 356, L 759 B 346, L=L. Lafuma, 3 vol., Edition du Luxembourg, 1951. B=L. Brunschvicg, Hachette, 1897.
- (9) Discours, VI, pp. 10~11.
- (10) 高瀬 学「ホセ・オルテガ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析」、国士館大学政経学会誌五五号、一三三頁。
- (11) Martin Heidegger, Sein und Zeit, M. Niemeyer, Leipzig, 1979, I : III, SS. 89~174.
- (12) J. Jelles (?~1683) メンノー派に属するフムステルダムの香料商人。「デカルトの哲学原理」の出版費用を出したのは彼であり、「神学」政治論」を友人に蘭訳させたのも彼であった。崑中訳「スピノザ往復書簡集」、四三三頁。
- (13) TDIE p. 4で同書がスピノザの初期の作品であるとを明らかにしている。

The Collected Works of Spinoza I, Princeton University, 1985及び畠中尚志訳「エチカ」、岩波文庫、一九七八年を参考とした。以後、Gebhardt 版だけを記す。

- (23) F. Mignini, *ibid.*, p. 293. 彼は TdIE が K. V. よりも先に作成されたところを見ている。
- (24) Ep, II, pp. 7~9.
- (25) Ep, II, p. 8. 彼はクーロンンの経験主義的帰納主義や sum を基底にしたデカルトの懐疑主義に反対の立場を取るのである。²⁸

- (26) F. Bacon, *ibid.*, Novum Organum, I-41, p. 14.
- (27) F. Bacon, *ibid.*, Novum Organum, I-51, p. 18.
- (28) F. Bacon, *ibid.*, Novum Organum, I-48, pp. 16~17.
- (29) Ep, II, p. 9.

二 「知性改善論」の構造及び梗概内容

- (30) TdIE, pp. 5~9. () の数字は Curley 版や畠中版が内容的セクションとしてつけている番号である。Gebhardt 版は用いづなう。以後、Gebhardt 版のページ数だけを記す。

- (31) TdIE, pp. 9~13.
- (32) TdIE, pp. 12~15.
- (33) TdIE, pp. 15~19.
- (34) TdIE, pp. 19~33.
- (35) TdIE, pp. 36~38.
- (36) TdIE, pp. 38~40.
- (37) TdIE, pp. 33~36.
- (38) Discours, I, pp. 1~11. デカルトは自己告白的体裁で、哲学に挑む姿を Discours で明らかにしている。
- (39) TdIE, pp. 5~7.
- (40) TdIE, p. 5.

- (41) TdIE, p. 8. K. V., I; XX, II; IV を Ethica, IV を参照せよ。
- (42) TdIE, p. 8.
- (43) K. V., II-XXXII, p. 107. Marcus Aurelius, *Meditations*, VII, 9-13, X, 6. 人間は自然の一部であり、自然の方法に従うという理念が説かれている。
- (44) TdIE, p. 8. K. V., II-VI, XXVI 及び Ethica, IV-XXXVII を参照せよ。
- (45) F. Bacon, *Novum Organum I. Discours, I.* を参照せよ。
- (46) perceptio という語は、当時、感覚的で知覚するもののみならず、真に認識乃至概念することにも用いられた。畠中訳「知性改善論」八九頁。
- (47) 竹内「前掲書」一三二頁。
- (48) 注 (51) を参照せよ。
- (49) TdIE, pp. 9-10. K. V., II; I, II; II 及び Ethica, II, Prop. XL, Scholium II などなる分類数と異なる。Gebhardt はゾーレンの影響を受けた時期のものと見做す。Gebhardt, *Abhandlung über die Verbesserung des Verstandes*, S. 76.
- (50) TdIE, pp. 12-13.
- (51) TdIE, pp. 11-12.
- (52) TdIE, p. 13.
- (53) TdIE, p. 11 n. h.
- (54) TdIE, p. 11.
- (55) TdIE, p. 11 n. h.
- (56) 桂 寿一著「スピノザ研究」東京大学出版会、一九八〇年、一〇七頁。
- (57) *essentia formalis* と *essentia objectiva* と同じく、日本語の適用は極めて困難を要する。特に、*essentia objectiva* に適合する日本語がなく。此の問題は畠中訳「知性改善論」九三-九五頁で詳細に検討されているので参考にせよ。私としては、Dr. Curley の意見等を得て、「観念内的本質」という日本語を選択した。畠中教授が指摘される如く、「或るものが、我々の観念として存在することを意味する」うえで一番ピッタリすると思うからである。

スピノザの「知性改善論」に関する一考察（藤 本）

- (59) TdIE, p. 14.
- (60) TdIE, p. 14.
- (61) TdIE, p. 15.
- (62) Oeuvres de Descartes, VII, ed. Adam and Tannery, Paris, 1973. *Meditationes de prima philosophia*, in *que Dei existentia et animae immortalitas demonstratur*, III, pp. 34~52.

- (63) TdIE, p. 15.
- (64) TdIE, p. 17.
- (65) TdIE, p. 15 n. n. Ep., XXXVII を参照せよ。スピノザは真の観念が我々にどのようにして生得的に存するのかわからなかつた。彼にとってそれは自然の探究に属する問題であって、方法論を取り扱う上での対象問題とはならないとしよう。

- (66) TdIE, p. 16.
- (67) TdIE, p. 16.
- (68) Discours, IV, pp. 10~11.
- (69) TdIE, p. 14.
- (70) 桂 寿一著『前掲「スピノザの哲学」一〇二頁。
- (71) TdIE, p. 19.
- (72) TdIE, p. 19.
- (73) TdIE, p. 19.
- (74) TdIE, p. 32.
- (75) TdIE, pp. 24~25.
- (76) TdIE, pp. 19~20.
- (77) TdIE, p. 24.
- (78) TdIE, p. 22.

- (79) 虚構の説明の為に、スピノザは、Ovid's *Metamorphoses* から多くの例を引用して、そのことを強調して、その *Elbogen* と対して、Parkinson は、メタモルフォーシス教をキリスト教と対する *creation* と *incarnation* の理念からの引用を行なっている。その *メタモルフォーシス* 教の *Joachim*, Spinoza's *Tractatus de Intellectus Emendatione*, Oxford, Clarendon Press, 1940, S. 124 n. 4. G. H. R. Parkinson, *Spinoza's Theory of Knowledge*, Oxford, Clarendon Press, 1954, pp. 101~102. Curley, *ibid.*, p. 27. Ovid's *Metamorphoses*, ed. K. K. Hulley, Univ. of Nebraska, 1970, 参照せよ。
- (80) *TdIE*, p. 20, p. 22 n. X, p. 32.
- (81) *TdIE*, p. 22 n. x.
- (82) *TdIE*, p. 29.
- (83) *TdIE*, pp. 20~21, p. 29.
- (84) *TdIE* p. 20.
- (85) *TdIE* p. 20.
- (86) *TdIE* p. 24.
- (87) R. Descartes, *Principia Philosophiae*, *Oeuvres de Descartes*, VII, ed. C. Adam and P. Tannery, Paris, 1973, I ; XLV, p. 67. *TdIE*, p. 25.
- (88) *Ethica*, I -Prop. III, p. 48. *TdIE*, p. 22. n. x.
- (89) *TdIE*, p. 27.
- (90) *TdIE*, p. 25.
- (91) *TdIE*, p. 22, n. x.
- (92) *TdIE*, p. 25.
- (93) *TdIE*, p. 25~26.
- (94) *TdIE*, pp. 25~26.
- (95) *TdIE*, pp. 28~29.
- (96) *TdIE*, pp. 29~30.

- (97) TdIE, p. 30.
- (98) TdIE, p. 30.
- (99) TdIE, p. 30. R. Descartes, *Meditation*, *ibid.*, V, pp. 63~71.
- (100) St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, 60, Blackfriars edition, Eyre and Spottiswoode, London, 1964~1966, 1, 79, 2, "Intellectus est potentia passiva." R. Descartes, *les Passions de l'Âme*, *Oeuvres de Descartes* XI ed, C. Adam and P. Tannery, Paris, 1897~1910, 17, "on peut généralement nommer ses passions toutes les sortes de perceptions ou connaissances qui se trouvent en nous."
- (101) Robinson & Joachim の二人の同書の最後まで課題「だけが取り扱われたものと考えているが、島中教授は二二三が「この二つの論議をなす二つの二つの二つを指摘している」。私は二二三頁を二二六頁の文節内容から判断して、島中教授の見解をとる。 Robinson, *ibid.*, S. 12. Joachim, *ibid.*, SS. 98~99. 島中訳「知性改善論」一〇一頁。
- (102) TdIE, p. 34. Ep., IV, pp. 12~14. *Ethica*, I -Prop 33, *Scholium* を参照せよ。
- (103) TdIE, p. 34.
- (104) TdIE, p. 34.
- (105) TdIE, p. 36.
- (106) TdIE, p. 34.
- (107) TdIE, p. 34.
- (108) TdIE, p. 35.
- (109) TdIE, p. 35.
- (110) TdIE, pp. 35~36. K. V., I; I, n. 3, p. 16, II, p. 34, III, p. 35.
- (111) TdIE, p. 36.
- (112) TdIE, p. 36.
- (113) 「確固・永遠な事物」というこの解釈は、今日まで、多くの学者によってなされて来た。島中訳、前掲「知性改善論」一〇三~一〇四頁と詳しに検討されている。 *Ethica*, I -Prop. 21~23, pp. 65~67. Ep., LXIV, pp. 277~279.

- (114) K. V, I ; VII, I ; IX, pp. 47～48, pp. 48～49, II ; V, pp. 62～65.
- (115) TDIE, p. 36.
- (116) TDIE, p. 37.
- (117) TDIE, p. 37.
- (118) TDIE, pp. 37～38. 真理の自明性の規則を意味する。
- (119) TDIE, p. 38.
- (120) TDIE, p. 38.
- (121) TDIE, p. 38.
- (122) TDIE, pp. 38～39.
- (123) TDIE, p. 39.

三 本宗要因の検討

- (124) Ep, LIX, p. 268.
- (125) TDIE, p. 4.
- (126) H. H. Joachim, *ibid.*, S. 11.
- (127) 竹内『前掲書』一一二頁。
- (128) Ep, LIX, p. 268.
- (129) Ep, II, pp. 7～9. K. V, Appendix, pp. 114～121.
- (130) 島中訳『前掲「知性改善論」』一一二頁。H. H. Joachim, *ibid.*, p. 1.
- (131) H. H. Joachim, *ibid.*, p. 11.
- (132) 島中訳『前掲「知性改善論」』一一二頁。
- (133) TDIE, p. 36.
- (134) TDIE, pp. 15～16, p. 36, p. 38.
- (135) TDIE, p. 38.

スピノザの「知性改善論」に関する一考察（藤 本）

- (136) 上藤喜作著「スピノザ哲学研究」、東海大学出版会、一九七二年、二二六頁。
- (137) TDIE, p. 38.
- (138) TDIE, p. 35.
- (139) TDIE, p. 35.
- (140) TDIE, pp. 15～16, 上欄「前掲書」、二四五頁。桂「前掲書」、一四四頁。
- (141) Ethica, I-Prop. 3, p. 47.
- (142) TDIE, p. 17.
- (143) R. Descartes, *Regulae ad directionem ingenii*, Oeuvres de Descartes X, ed. C. Adam and P. Tannery, Paris, 1897～1910, p. 379, p. 382. 以後 Regulae の略記とする。以下 Roth の Regulae を用いる。C. Roth, Spinoza, Descartes and Maimonides, Boston, Joachim & Borkowski 及び上藤教授のスピノザの関係を論じたもの。C. Roth, Spinoza, Descartes and Maimonides, Boston, 1924, p. 10. Joachim, *ibid.*, p. 95. St. von Dunin Borkowski, Spinoza, 1936, S. 292. 上欄「前掲書」一一一頁。
- (144) Discours, II, III, pp. 11～31.
- (145) TDIE, pp. 24～25.
- (146) Td IE, p. 27.
- (147) TDIE, p. 38.
- (148) TDIE, pp. 33～34.
- (149) TDIE, p. 13.
- (150) TDIE, p. 34.
- (151) Discours, IV, pp. 31～40. 以下「前掲書」一一一～一一三頁。
- (152) G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik*, W. W. III, S. 178.
- (153) TDIE, p. 8. K. V., II-22, pp. 100～102.
- (154) TDIE, p. 9, p. 32.
- (155) TDIE, p. 15, p. 17, p. 26, pp. 36～37.

- (156) TdIE, pp. 8~9.
- (157) Per vim nativam intelligo illud, quod in nobis à causis externis non causatur, quodque postea in meâ Philosophiâ explicabimus. 亦知く此理を他處より。TdIE, p. 14, n. k.
- (158) TdIE, pp. 34~37, p. 38. G. W. F. Hegel, *ibid.*, S. 31. 桂『前掲書』一〇九頁を参照せよ。
- (159) TdIE, p. 8.
- (160) K. V., I ; X, pp. 49~50, II ; IV, pp. 59~61. *Ethica*, Praefatio, pp. 205~209. TdIE, p. 8.
- (161) TdIE, pp. 10~11.
- (162) 上巻『前掲書』一四九~一六二頁。
- 四 未完断図の断図
- (163) TdIE, p. 10, pp. 38~39.
- (164) H. H. Joachim, *ibid.*, V, pp. 198~206. L. Brunschvicg, *Spinoza*, Paris, 1923, pp. 31~54. H. A. Wolfson, *Philosophy of Spinoza*, Harvard Univ., 1934, pp. 3~60. H. F. Hallett, B. de Spinoza, Univ. of London, 1957, pp. 31~43. J. Freudenthal=Gebhardt, *Spinoza Leben und Lehre*, II, S. 122.
- (165) H. H. Joachim, *ibid.*, pp. 204~205. L. Brunschvicg, *ibid.*, pp. 31~54. H. A. Wolfson, *ibid.*, p. 45.
- (166) H. F. Hallett, *ibid.*, p. 31. C. Gebhardt, *ibid.*, S. 122.
- (167) Euclides, *Opera Omnia*, ed II. Heiberg et H. M. Lipsiae, 1883~1916. 中村幸四郎『他説』共立出版『一九七〇年』
- (168) TdIE, p. 50.
- (169) TdIE, p. 12, ドーナトリニ第廿卷『定理一カと二つと』中村訳『前掲書』一四九~一七八頁を参照せよ。
- (170) Discours, IV, pp. 31~40.
- (171) R. Descartes, *Principia Philosophiae*, II ; XXXVI.
- (172) Discours, V, pp. 46~49.
- (173) L. Brunschvicg, *ibid.*, p. 112ff. R. Descartes, *Principia Philosophiae*, IV, p. 653ff.
- (174) R. Descartes, *Géométrie*, III, *Oeuvres de Descartes* VI, ed, C. Adam and P. Tannery, Paris, 1867~1910, p. スピノーザの「知性改善論」に関する一考察 (藤 本)

475.

- (175) R. Descartes, *Meditation*, II, pp. 23~34. *Discours*, II, V, pp. 11~22, pp. 40~50. *Regulae*, pp. 379~381.
 (176) 田辺元全集Ⅱ、筑摩書房、六〇〇以後の頁。斉藤 博著『「スピノザ」の研究』、創文社、昭和四九年、一四七~一五一頁。

五 おわりに

- (178) TALLE, p. 8.
 (179) Ditto, *Aeternitas*, A Spinoza Study, Oxford, 1930, p. 148.
 (180) H. A. Wolfson, *ibid.*, p. 39ff.
 (181) H. A. Wolfson, *ibid.*, pp. 54~55.
 (182) 拙稿『「私のスピノザ研究の覚え書き」』三国土館大学大学院紀要三号。
 (183) 例えば実体の概念についてである。
 (184) 本稿「はじめに」を参照せよ。
 (185) *Ethica I. De Deo, Def.* pp. 45~46, *Axioma*, pp. 46~47, *Prop.* pp. 47~83.